



まるお

<道しるべ>

No more Hiroshima
No more Nagasaki
No more Hibakusya
No more war

被爆者 山口仙二さんが国連総会
で述べたスピーチの中から

<学校教育目標>

自ら学び 自他を尊重し
心豊かでたくましい生徒の育成

<重点目標（スローガン）>

感謝+優しさ=笑顔と幸せへの道

発行：長崎市立丸尾中学校

文責：校長 川口 猛

令和8年8月9日 NO17

私たちの生活は、本当に平和だと思いますか？

戦争で傷つき、亡くなった人たち、無念さを決して忘れず、私たちに平和のバトンを渡した方々の気持ちを大切にしたい。今の私たちの生活は、あたりまえに存在するのではないことを心に刻んでおこう。

平和の尊さを学び、受け継ぐことは、私たちの使命である。それは、微力であっても、無力ではない。小さな一歩であっても、皆でやれば大きな一歩になる。

これから述べる話は、毎年学校便りに記載しています。平和について考えていきたいと思います。

今から30年ほど前、私は、東京都で大学生活を送っていました。私の通う大学は、全国各地から人が集まり、東京都出身はもちろんのこと、大阪、静岡、広島、福岡、石川、宮城、千葉、埼玉、神奈川、新潟、秋田、北海道……様々な都道府県出身者が周囲にいました。仲間の中で、私は唯一長崎出身でした。仲間と話をする中で、平和に関する意識・考え方が大きく異なることを実感した学生時代でした。私が考える当たり前は、決して当たり前ではないことに気づかされたのです。

ある日、友人たちと夏休みについて話をしました。夏休みに登校する登校日についてです。私は、長崎出身ですから、8月9日は必ず登校日だったと話しました。8月9日に登校することに何の疑問を持っていません。私は当たり前のことと考えていました。しかし、不思議なことに、友人たちは、8月9日に長崎県の生徒が登校するという事に疑問を感じていたのです。「8月9日に学校に行ってなにをするのか？」と問われました。「8月9日は学校で平和学習をするのだ！」と言うと、他県出身の友人は、そういうことはないと言いました。しかも、なぜ、「8月9日は何の日か？」と問う友人もいたのです。友人は8月9日の意味をわかっていなかったのです。たまたま分かっていなかった友人なのかもしれませんが、私は、8月6日に部活の最中、黙祷をし、そして、8月9日には登校して平和学習を行うことに何の疑問も持たずに生活してきました。決してそれは当たり前のことではないということに気づかされたのです。長崎にとって、8月9日の原爆投下の日に平和の尊さを改めて学習し、亡くなられた人たちのご冥福をお祈りするのは当たり前かもしれませんが、長崎を離ればそうではない現実もあるのです。その意味では、私たちは、平和の大切さを学習できるチャンスに恵まれているし、その機会が多いことは、有り難いことだと思うのです。核兵器の恐ろしさ、長崎・広島の惨状、核兵器の使用は絶対に繰り返してはいけないことなど多くのことを学び成長することができます。だからこそ、長崎で学んだ平和の大切さを語り継ぎ、そして、後世に伝えていくことは、ある意味使命だと思います。語り継ぎことは小さなことかもしれませんが、そこから平和のネットワークが生まれることは、世界の平和の実現にとって大きな一歩になるのです。一人一人は微力かもしれないが、皆でそのネットワークを築いていけば、それは大きな力になるはずですよ。

さて、私たちは、平和学習をする際に、当然長崎の原爆について学び続けてきました。学び続けてきた私たちの普段の生活は平和なんでしょうか？そこに疑問を持ったことはあるでしょうか？私たちの身近なところも平和なのか？そして、長崎以外後も平和なのか？と考えたことはあるでしょうか。人の感情や利害関係が対立し、尊い命を奪ったり、心身を傷つけたりする戦争。相手のことを思いやる心さえあれば、それは起こるはずもない人間の行動です。その視点から私たちの生活を振り返りたいものです。武器を持って戦わずとも、他人を傷つけることはあり得るという意識が私たちには必要ではないでしょうか。世界の中では、多くの人が戦争惨禍に（さんか）に苦しめられています。その苦しめられ

ている人たちは、その戦争が起こることを予測していたでしょうか？きっとしていなかったはずで。戦争はしてはいけないという考えや人を傷つけてはいけないという気持ちが世界中に広がっていくきっかけを私たちからつくりたいものです。

私たちは、長崎の地にいるから長崎の原爆投下について学ぶことができます。長崎以外の地に住む人が長崎のことを知らないことを「どうして知らないの？」と言いたくもなりますが、違った角度でこのことを考えれば、次のようなことが見えてきます。私たち長崎の地に住む人間が、**長崎以外の戦争についてどれだけ知っているかと言われたときに知らないことも多いという点です。**沖縄戦について、東京大空襲について、神戸の大空襲について、佐世保の大空襲について、知覧の特攻隊について、川棚の特攻回天の訓練基地について、学童疎開（がくどうそかい）について、学徒動員について……。知らないことはたくさんあります。平和な世界をつくるために、「知ることからはじめよう」が重要ではないでしょうか。知っていること、知らないことをただ比較し、知らないことを責めても何のプラスにもなりません。知らないければ、知ればよいのです。事実を知らなければ、知らないがゆえに、私たちは、同じ悲しみを繰り返すのです。私たちは、「知る」ことから始め、そして、知り得たことを「伝える」「継承（けいしょう）する」ことが大切だと思います。

私は、被爆2世です。母が被爆者です。小さいころから、原爆の恐ろしさを聞いて育ってきました。原爆投下後の世界は、原爆資料館に展示している写真とは比べものにならないほど恐ろしく、悲しく、つらい世界だったと聞かされ育ってきました。「水をください」「助けて」「苦しい」という叫び声、「あー」「うー」といううなり声。遺体を見つけて泣き叫ぶ家族の声。現実とは、想像をはるかに超えるものだったと聞きます。**1945年8月9日から81年経過します。**被爆者は遠くない将来この世界からいなくなります。被爆の惨状を直接語れる人はいなくなります。「単なる過去の出来事」で終わらせることなく、長崎が最後の被爆地になるように、平和の尊さについて学び続けていきましょう。そして、語り継いでいきましょう。長崎以外の地における戦争も学び、グローバルな平和の眼を養っていきましょう。**ふるさと「長崎」から平和を発信していくのです。たとえそれが小さな一歩でも、それは無力ではないのです。**

仲間の幸せを自分の幸せと感じる心

私たち人間は、社会的な存在と言われ、必ず社会と関わりをもち生活をしています。社会と関わりをもつと言う表現は難しいですが、簡単に言えば、人間は、自分以外の人間と一緒に生活し、互いに支え合いながら生活し、決して一人では生活をするのではないという意味だと解釈しています。全校生徒の皆さんは、様々な集団に所属し、切磋琢磨（せっさたくま）しながら、お互いに支え合って生活をしていると思います。支え合う仲間同士で、頑張った成果をたたえ合うことができれば、それは、きっと、互いの幸せにつながると信じます。

いじめ、からかい、暴力、SNSでの誹謗中傷、SNSでのデマや噂の拡散……。私たちの生活は、心の安住を確保できていない現実があるのです。一緒にいて幸せを感じるという人間関係であつたてほしいのです。平和を考える時、足元から……。私たちの生活の中に、有難さを見抜き、それに感謝しながらも、そうならない現実を直視して、足元を固めたいものです。

本校の今年度のスローガンを設定するにあたって、何事も『あたりまえ』と思っていけないという考えがあります。今の私たちの生活は、戦争で大きな犠牲を受けた人たちが、生きたくても生きることが許されなかった人たちが、若い人々が、命を懸けて敵に体当たりをした人たちが、中学生の年齢で、看護師の仕事を強制され、爆弾が飛び交う中、洞窟の中で負傷した兵士をたちを手当し、最後に自決を図った人たちが、原爆で苦しんだ多くの人たちが、戦後の復興のために必死に働いてきた人たちが、様々な方々の歴史の上に我々の生活はあるということをあたり前とは思わず、『ありがたい』という感謝の気持ちを持つことが大事と考えるからです。『ありがとう』という言葉で、生徒一人一人の幸せにつながり、そして、丸尾中学校という学校集団の幸せにつながると考えたからです。また、人間同士の対立、いじめ、ネットでの誹謗中傷などは、幸せボケした私たちが、人間に対して優しさを失いつつあり、エゴイズムが強くなっていると思うのです。憂い（うれい）にそっと寄り添い、相手の力になることができれば、戦争などは怒らないはずなのです。平和で、安全に過ごし、笑顔で沢瀬をつかめる資質を育成することこそ大人の務めと考えています。スローガは、平和、いじめ根絶、世界平和、幸福な社会と結びつけています。